

## コバルトノベル大賞 **二次通過**

『COUNT UP』

原稿用紙換算102枚

鷹月秋夜 著

3853、3864、3865…  
カウントする。

頭の中で一つ一つ増えていく数字。

10000数えたら、2時間46分40秒。

横断歩道の真向かいにそびえたビルにかかっている時計の秒針の動きを見つめながら、俺はタイル張りの歩道に座り込んでいる。もたれているシャツターは、いつも閉じられたままだった。潰れた洋服屋の広告が大きくペンキで描かれているけれど、雨風で薄汚れていた。

数えている間だけは、流れていく時間が感じられるようで、俺はこうやってもう1時間以上過ごしている。

ひっきりなしに目の前を人が通っていく。

汗を拭きながら何かに苛ついているサラリーマン、昼御飯を食べに行くOLの群れ、みんな俺を見ない。自分のことで精一杯。

誰にも注目されないから、俺はここにいられる。

無関心である事が、俺の救い。

誰からも声をかけられないから、俺はこうやって座っていられるのだ。

雑踏の中が安心するように。

歩いてばかりの人たちの中で、ただ座り続けていることが、恐れている何かに対抗しているみたい。

俺は今日もそこに座り続けている。

「孝宏、お帰りなさい」

「……ただいま」

家に帰ってきた時の俺は、口が重い。日中も話すことなんてほとんどないのだから、しゃべるのが本当に億劫なものもあったけれど。

「もう予備校には慣れた？ 勉強の調子は？」

「うん…なんとかやってるよ」

台所で夕飯の準備をしている母さんは、振り返った。揚げ物なのか、油の匂いが俺はあまり好きではないのだけだ。

俺は曖昧な調子で、返事を返すだけだった。

「もうすぐご飯できるから」

「わかった」

やっと母さんが準備に戻ってくれて、会話が終わったことにほっとして俺はリビングを出た。階段をゆっくり上がって、一つ目の部屋の前で立ち止まる。

鍵のないドアを開けた。最初に視界に入るのはぎっしり詰まった大きな本棚。自身は中学生の頃からの参考書や問題集だった。それでも入りきらなくて、机の横に積み重なっていたりする。

俺の部屋の中は、参考書だらけだ。

「孝宏、いい本があったのよ。きつとこれも役に立つわよ」  
そう言って、母さんは俺に、新しい参考書を渡す。

「何か足りない本があったら言いなさい、買ってあげるから」

決まって、母さんはそう言う。

もう十分なのに。

一度だって開いたことのない本が大半で、母さんもそれを知っているくせに、また同じ事を繰り返すのだった。

俺が大学受験に失敗した時、母さんは笑っていた。

仕方ないわねえ、もう一年勉強しなさい。あと一年頑張れば、もっといい所に行けるかもしれないし。妥協したくないんだから、しょうがないわよね。

俺は内心ほっとした。責められると思っていたから。

夜遅くに帰ってきた父さんは、俺の結果を聞いて、苦々しそうな顔だけでそれを済ませた。

孝宏のことは、全て母さんにまかせるから。余計なことをこつちに持ち込まないでくれ。

子供の俺の目の前でも、そう言い放つような父親だった。

それじゃあ早いうちに予備校決めなきゃね？

いつの間にか母さんは、何冊も有名な予備校のパンフレットを揃えていた。

夕飯の時にそれを取り出して、俺にプレッシャーをかける。

こちら辺は大きい所もないし、いつそのことお父さんに頼んで全寮制でちゃんと毎日管理してくれる所に行くって  
いうのはどう？

ほら、ここなんかいいじゃない。有名な先生が教えてくれるんだって。聞いたことあるんじゃない？

まるでセールのトークみたいだ、と並べられたパンフレットをぼんやりと俺は見ている。食卓と一緒にしている妹の知香は我関せずといった顔で黙々と食事をしている。慣れているのだ。

小さい頃から、俺はまるで一人っ子のように大事にされていた。アルバムの写真は俺の方が倍多いし、小学校の頃にまぐれで取った書道コンクールの賞状は、まだリビンクの目立つ所に飾ってある。母さんは知香の世話より、明らかに俺の世話を優先させていた。俺がそれを望むと望まざるに関わらず。当然かもしれないけれど、知香は母さんだけでなく俺ともあまり話をしないようになった。だからこつという風景など知香の方では面白くないのも予想がつく。俺のせいではないのだ、と不機嫌な態度を取る知香に言おうとした時期もあったけれど、逆なでしそうな気がして、結局そのままずるどきこちな関係が続いている。

目の前で相変わらず母さんは俺に予備校の奨めを説いている。けれどいくら聞いても、俺はそんな所に行くつもりはなかった。

これ以上金をかけてもらいたくない。金をかけた分、感謝というものを要求されている気がした。もちろん、今まで何不自由なく育ててもらった事には、口には出さないけれど感謝している。しかし母さんにとっては俺が素直に言うことを聞いているのが一番嬉しいのだから、俺に何かをすることで俺の将来に対する全ての決定を強制的に奪おうとしているような怖さがあった。

知香が箸を置いて、何も言わずに部屋に上がっていく。多分また機嫌を悪くさせたのだろう、と心の中でため息をついた。

そろそろ話も終わらせたい。毎日こうでは、顔を合わせるもの嫌になりそうだ。そう思って、結構軽い気持ちで言った言葉だった。

「俺、家で勉強する気なんだけど」

今まで笑って話していた母さんの表情がゆっくりと怒りに変わる。言われるままに予備校に入るだろうと思っていたのだから、当然反対されるだろうと、ここまでは心の準備ができていた。でも。

何を思ったか、母さんは今まで手にしていた冊子を床に強く叩きつけ、立ち上がる。立ち上がる時にドン、とテー

ブルにぶつかつた勢いは、予想以上に強かつた。俺は少し慌てて、椅子を後ろに引く。

「何言ってるのよ」孝宏だけじゃなくて、母さんも困るのよ、肩身が狭いのよ」

「ちよ、ちよっと待って…」

鬼のような形相。自分の意見を無視されたことに対するどうしようもない怒り。自分の導きは全て正しいと考えている故の。

両手で押さえようとする俺が次の言葉を挟む隙もなく、興奮した母さんは早口で言った。

「木下さんの息子さんは、もう引つ越しの準備してるって話なのよ。あそこ、有名な所じゃない。それなのに自分の息子は、どこにも通らないで浪人です、しかも自宅で、なんて。

冗談じゃないわよ、今までどれくらい心配してやったと思ってるの？ 人の身になって考えなさい！」

その後延々と続く怒鳴り声を、俺は何も言い返せずに聞いていた。半ば唾然としていたので、言い返す事など思いつけなくなっていたのだ。あまりの事で驚いたというより、ここまで急に変貌した母さんが本当に怖かつたのだ。

そして数日後、俺は電車で1時間かかる、この町で一番大きな予備校に入学金を支払つた。

この前の激しい怒りなど全く忘れたような母さんは、満足そうに予備校の先生に挨拶していた。

よろしく願いますね、来年こそはなんとかしてもらいたいです。まあ、私はこの子の自主性に任せていたつもりなんですけどね、いざとなったら結果がこうなつてしまったものですから。

自主性、なんて言葉を母さんの口から初めて聞いたな。

孝宏君なら、もう一年頑張ってくれば大丈夫ですよ。

今年残念な結果に終わったのも、不思議なくらいで…。

現役時代に受けた模試の成績表を見ただけで、そう判断する教師。

気が合つたらしい二人の会話を、俺はただ黙って聞いていただけだった。密かに自分の意志ではないということを見せたかったのかもしれない。でもそんなちっぼけな努力で伝わるわけがなかった。

コンコンコン！と神経質なノックに、俺は体をびくりと震わせた。ぼんやりしていたら、もう8分も時間が過ぎていた。

「孝宏ごはんよ、降りてきなさい」  
「わ、わかった」

服を脱ぎながら、階下に足音が遠ざかるのを聞く。  
静かな時はいいんだ。だけれど、一旦機嫌を損ねたら…。  
俺はうつむいて、大きく息を吐いた。  
その非難を受けずにすむにはただ自分が、あの人に何も  
言わずに従っていればいいだけの話だ。

しかし今は確実に、裏切っていることになっている。何  
も知らない。

その事に深い罪悪感や、もし知れた場合の脅えを感じる  
と同時に、自分はただの操り人形ではないと密かに抗議し  
ているような、つまらない喜びがあったのも事実だった。

「え…では次の4番を解きます」

予備校の授業が始まって10日。

予習してきた問題を答えあわせして、復習して。

一番最初からやりなおす。今まで散々やってきた事だ、  
慣れているはずだった。

右腕の時計を見るのは、もう何回目だっただろう。

何度見ても、時間が進まない気がする。

まだあと5分もあるって？

「aが0より大きい時、 $y = a^2x + xb + c$ のグラフはこ  
うなる…」

チヨークの黒板にこすれる音が、耳に障る。

時計を見る。

4分、38秒。

ああ、どうしてだろう。

「しかしaが0より小さい場合…」

イライラする。意識の中には、結局何もできずに従って  
いるじゃないかという自分の笑い。うるさい。

顔を上げて、周りを見た。

まっすぐ前を見る奴。

カサリ、とノートをめくる音、文字を書き込む音。

目的を持って、正しい方向へ。みんなきつと信じている  
のだろう、ここにいることになんの疑問も感じない。そし  
てそれがきつと当たり前。

予備校に通うという行為が、母親への従属などと感じて  
いる俺だけが仲間外れのようにだった。

指先が細かく震えて、息が苦しかった。

俺だけが場違いだ。

授業の終了を告げるチャイムが鳴った途端、立ち上がった。  
ていた。

気持ち悪い。

そう思って、立ち上がった。

出していた筆記用具をカバンにつめて、何も言わずに教室を出る。

一番後ろの席の奴が、横を通る俺を不思議そうに見ていた。

振り返ってしまつと、まるでそこに俺が未練を残しているポーズのように思えて、振り返らなかつたけれど。

こうして、俺は外に出た。

初めの行き場は公園だった。ゲーセンや映画館も考えたけれど、繁華街のど真ん中にいたら、知っている誰かと会うような気がして、少し離れた所に残っている神社の裏にひっそりとある小さな公園を選んだ。緑が生い茂っていて、地面のほとんどが影に覆われている。ねぐらがあるのか、ハトがたくさんいた。昼になると、パンを買ってきて食べた。

注意深く俺を観察しながら時折降りてくるハトにパンくずを投げてやると、クク、と低く鳴きながら白い粒に走っていく。

ハトはいつまでたつても俺に慣れようとはしなかった。俺がじっとしていると、数m先の餌をついばんで、ぱつと飛び立って行くだけ。何度か近づいてみようとしたのだが、足を踏み出す前にさっといなくなってしまうのだ。

頭上の木の枝に固まって止まっている群れを見ながら、一体自分が何をしているのか、笑いが浮かんでくる。

自分であるそこから抜け出したくせに、今の状態を後悔し始めている。

どこにも行き場のない顔をして、物言わぬハトなんかと向き合つて。しかもハトにさえ相手にされず。一体何やつてんだよ。

泣きたいような気分になつて、半分以上残つたパンを固まりのまま地面に置いた。

立ち上がる俺に驚いている一方で、パンめがけて走り出す姿は、俺に興味がないのだとはつきりわかりすぎた。公園から逃げ出すように、早足になった。

そして行く宛てのなくなつた俺は、街を歩き出した。動いていればすれ違う人にも『俺に似てる人』程度の意識で

終わるだろうと思って。まるで警察に追われた犯罪者のような気分、一人で笑った。

だけど動き続けるのもやがて疲れてしまった。

ある日アーケードの下を歩いていると、突然上から何かが叩きつける音。すぐに雨だとわかったけれど、傘を持っていない事に気づいて、やっかいだなとだけ思った。

アーケードの端まで来たら、コンクリートから跳ね返るほどに激しい降りかたで。交差点を待つ人も、多分俺と同じ表情をしていたと思う。

その人達は、信号が変わるとまた向かいのアーケードまで強い雨を浴びながら走って行ったけれど、俺にはそんな必要がないのだった。ただ歩いているだけなのだから、敢えて濡れる事もない。雨が上がるのを待てばいい。

歩き疲れていた俺は、まだ時間に余裕があるのか同じく雨宿りしている人達を避けて、シャッターの閉まっている店の前に歩いていった。少しの休憩のつもりで。

街を何度も歩くうちに、こここの店が閉じたままなのは知っていた。両隣の店は賑わっているようなのに、何故新しい店ができたりしないんだろうと疑問に思っていた。けれど今座り込んで、疲れた足を休めるには都合のいい場所だった。

茶色と白で模様になったタイルに直に座ると、なんとなくしっくり来た。雨はまだ降っているけれど、水滴がこちらに飛んでくるほど近くはない。

ふと見上げれば、向かいのビルに大きな時計。なんだか初めて見た気がした。昔はよく買い物でここらに来ていて馴染みの風景なのに。歩き回っている時だって、俺はあの時計に気づきさえしていなかったらしい。

こういう事が、余計に今の自分を小さく見せた。周りに関わる事も、気を配ることもできない俺の居場所など、当然ないのだと。小さく笑いながら、なんとなく時計を見つめたままだった。しばらくすると、長針がコチリと一つ動く。また待っている、もう一つコチリ。何かが進んでいるのを確かに感じる。腕時計はデジタルの文字を刻んでいるけれど、これは結局文字の変化に過ぎないと思った。

1、2、3...

何の訳にも立たない事をしている。

時間の番人になれるわけなし、誰かに褒められる事でもない。

それでも、人混みの中で時計をぼんやりと眺めながら数

を数えるのは楽しかった。

座っている俺を咎める人はいない。誰も俺に興味がないのは公園と同じだけれど、人が絶えず流れていくことで、仕方がないと自分に都合良い納得をしていた。

誰も何も言わないのは、俺を知らないからだ。知っていて無関心な父さんみたいなのは違う。俺の事が気に入らなくて、無視している妹でもない。そして、負担に思うほどに俺の進む先を自分の思い通りに修正しようとする母さんもいない。

一人だけの王国を手に入れたように、俺は嬉しくなりながら数を数え続けた。永遠に続けばいいなと今更子供のように考えた。このままでいいなんて思っていない。けれど、ただ俺は何者にも縛られない時間が欲しかったのだ。自分で探し当てた場所が類いまれなる宝物だったような気がして、大切にしようと思えば俺は膝を引き寄せて体を小さく丸めた。

カウントは続く。

4498、4999、5000。

折り返し地点だ。この間に大時計の長針はいくつも動いている。俺のした事の確かな形。

座り続けて、もう2週間が経っている。ゴールデンウィークはもうとくに明けて、人の多さも落ち着いたようだった。この頃になると、以前感じていたようなはしゃいだ嬉しさは消えつつあった。

予備校のある駅の一つ前で降りる。まだ賑やかでない、出勤する人達だけが急いでいる街をぐるりと二周すると、そろそろ開店準備も出来上がっている頃だ。それに伴って色んな場所から人がやってくる。時々俺はいたずらのようにその人の波に混ざってみた。でも俺の行き先はないのだから、すれ違う呼吸に合わなくて肩がぶつかったりと余計なことばかりしていたので、また波から外れてしまう。そのうちにあの定位置の前まで来て、俺は誰かを待ちくたびれた振りで座り込むのだった。

そろそろ無意識のうちに数えるのが癖になって、逆に考え事に熱中してしまうようになった。そうすると気が付いた時には同じ数だけを唱えていたりする。あれ？ もう一度やり直しか、と飽きずにカウントを再開する俺は、はた目から見るとおかしな人間だろうとわかっている。けれど何かせずに時間を潰すことができなくて、でも時間を潰す

事が一体何の意味があるのか、次第に考えなくなっている。ただ目の前の事が過ぎてくのを待って。

今日も5時になったら立ち上がって、何もなかった風に戻って、当たり前障りのない会話を交わすのだ。無意味な時間が過ぎていく…。

「ちよっと」

「あ……え？」

周りの足音や話し声、車の音も混じった中に聞こえたものだから、俺に話しかけられたのだという確信が持てなかった。だが、目の前の女の子が真っ直ぐ俺を見ているのがわかると、一体なんだろうと少し頭がパニックになる。

制服を見たことはあるけれど学校名まではわからない、白いカットソーのシャツに紺のスカートを着た女の子。ストレートの髪は肩よりも長めで、俺の目の前にしゃがんだ時に、ふわっと焦げ茶の髪が揺れた。

誰なんだろう。

「何してんの？ 毎日ここにいるけど」

その子はそう言って、指で地面を指した。

「何見てんの？」

ぼかんとしてる俺を見て、その子は笑って言い直した。

「話しかけられるの、苦手なタイプ？」

「そういうわけじゃないけど」

いつまでもおろおろしているのがかっこわるい事に気づいて、俺は取りあえず意味のない笑顔を作った。

「そう。…ちよっとお邪魔する」

俺の横にすくと体を移動させた彼女は、リサーチするように辺りをきよきよ見回している。

相変わらず目の前は、忙しく歩いていく人で一杯だ。

そしてそういう人から見れば、座り込んだ若者が1人から2人変わった、それだけなんだろう。

「ふうん…人ばかり」

それほどつまんなさそうでもなく、ただ感想のように彼女は言った。

「そうだね」

俺も頷いた。その前に、話しかけてきたこの子が、一体どういうつもりかもまだわかってないのが、少し心残りだ。

「いつも何してんの、それで？」

また俺の方を見て、彼女は聞く。何してんの、と言われても…と俺は困って、話題を変えようと口を開いた。

「そつちこそ、なんで俺なんかに話しかけてるわけ。わざわざこんなところで座り込んでるようなヤツに」

「だって知ってる人だもん」

「え？」

知り合いの顔が一気に頭の中を駆けめぐる。一言二言交わしただけの人さえ浮かんで来たけど、これというのが見つからなくて、また困った。その顔を見られたのか、得意そうに彼女は教えてくれた。

「朝、同じ車両に乗ってるの」

知らなかった。

俺は周りを見ていないし、周りに見られないと思ってたから。

けれど、たったそれだけの事で全くの他人に話しかけてくる彼女の気持ちが変わらなかった。

「そ…それだけ？」

「それだけ」

彼女は、楽しそうに頷いた。

「吊革つかまつてる時、周りに全く興味ないって感じでいつつもぼーっとしてるから、なんとなく覚えてたんだよね。それでたまたま見かけたらこんな所いるし、あんま怖くなさそうな顔してるから話しかけてみた」

それに今ヒマだったし、と続けた彼女に、俺はどうリアクションを取ってよいのだろう。そつちの時間潰しにはいいのかもしれないけど、俺の方は正直言って困るだけだった。

「ねえ、まさか一日中ここにいるわけ？」

「まあ…結構そつかも」

結局話がこちらに戻ってきてしまっって、俺は仕方なく首を振った。時々歩き回ったりするけど、大半はここだから。ただ自分の立場から考えると、今やっている事がいいとは到底思えないから、返事をするにもかなり気が重かった。

「ふーん。へんなの」

それでも何故か、彼女は俺にあきれた様子はなかった。

「何か、面白いことがあるのかな…」

そう呟きながら、立ち上がるうとはせずに人混みをぼんやり眺めている。俺も何も答えられなくて、恥ずかしくなかった。今頃自分の頭の中を話したって、誰かに理解されるわけがないし笑われるだけに決まっている、と妙に強く思っていた。けれどこのまま黙っているわけにもいかなくて、口を開いた。

「あのさ、名前、教えてよ」

「いいよ。シマダ アヤ。アヤでいいよ。そっちは？」

「アサダ、タカヒロ。じゃあ俺も、タカヒロ、で。漢字は

…」

地面のタイルに、人差し指で名前を書いた。

「ふうん、そんな字なのか。私のアヤはこれだよ」

彼女も同じくタイルを使って、彰という字を書いた。透明のマニキュアを塗った爪が光り、動く指先が綺麗に見えた。

「まだ高校生、だよ」

と、明らかに校章らしきマークのプリントしてある鞆を指差すと、彰は苦笑した。

「そう。2年生。この鞆、だっさいよね…制服は別にいいけど、鞆まで学校指定じゃないとダメって、おかしいよね」

大げさにためいきをついてみせた彰は、笑いながら何度か乱暴にそのマークを叩くので、俺も合わせて笑ってしまった。

「そっちは毎日何やってんの？ プー？」

「いや…そうじゃ、ないけど」

「そっくだよね。じゃなきゃ毎日電車乗る必要ないっか」

納得しながら彰は質問を続ける。

「じゃ、大学生」

「……浪人」

俺の声は沈んでたと思う。はっきり言って、人にはれるのは恥ずかしいと思ってた。

友達もみんな順当に、大学に行った。

今更別の学部に変更する事は考えられなくて、しかも母さんが猛反対だったのもあったから。

「ああ、予備校か」

何度か頷かれて、俺も曖昧に頷いた。聞かれた。

こうなっただけで、当たり前で聞かれるだろうと予測していたこと。そしてどうしてこんな所にいるの？と聞かれるだろうなと身構えた。

でも彰は、何の非難も俺にする必要は感じていないようだった。ただ「ニニ」と笑って俺を見ている。そういう事であるよね、というような暗黙の了解を得た気がして、俺の心が軽くなると、口の滑りも良くなった。

「あのさ、これからヒマなの？」

「んー…多分ね。気が向かない限り」

「何？ 待ち合わせあるんじゃないの？」

ケータイの時計をちらりと見た姿と言葉に引っかかりを感じて、聞いた。彰は後ろのシャッターにもたれながらしばらく空を見あげていたけれど、今度は本当のためいきを吐いて言った。

「今日は行かない。どうせ知らないオジサンだし、あつちも待つてないと思う」

今度は、俺が黙り込む順番だった。彰の言葉を飲み込んでいくうちに、こんな田舎でもそういうのあるんだ、となんだか感心に似た気持ちも湧いた。けれどやっぱり心を占めたのは、彼女への落胆だった。俺はさっきの彼女のように、そういうもんだよね、と笑うことができなかった。なんとなくだけど、ものすごくこだわってしまうような、許せない物。

「…なんて顔してんの」

俺の気持ちを読みとってか、少し笑いながら彰が言う。それでも俺の気持ちの冷えは止まらなくて、久しぶりに人ときちんと話したはしゃぎのようなものはすっかりなくなっていた。

「別にいいじゃん」

何も言わないままの俺に、彰の声も不機嫌に変わる。

「だって…ダメだよ、そういうの…いくら金欲しくてもさ！」

うまく言えない。何も相手を納得させる言葉が出てこなくて、思わず声だけ大きくなった。何事かと通行人が立ち止まったけれど、すぐにまた歩き出していく。そう、あなた達には関係ない話だ。

「お金…も欲しいけど、それだけじゃないよ。する前にさ、会社の話とか悩み事相談とかさ、するんだよ。リストラされるかもどうしようってオジサンいたり、結構真面目に話してくれるんだから」

まるで俺に理解してもらいたがってるように、彰は必死に言う。

「話なんかしたくないって人もいるけど、そういう人は、ご飯おごってもらったとこで逃げちゃう。だって、なんか焦ってる感じでヤじゃん？ これは一つだけ、私の中で決めてんの」

それでも俺の悲しいような怒りのような複雑な気持ちは流れていかなかった。

「そんな事言っても…結局最後は、そうなんだろ。親にもらった身体を、さ…」

世の中の道徳、みたいなことしか俺の頭の中には思い浮かばなかった。いつも親に言われている事をうざりたいと思ってくせに、いざ自分で意見を言うとなると何かのゴピーみたいにしか話せない人間。そして彰を説き伏せる事など到底できないだろうとわかっていながら、こんなことを話している自分の矛盾。

「…まあ、あんたにはわかんないでしょ。わかんなくていいけど」

とうとう完全に機嫌を損ねた顔で、彰は立ち上がった。カツン、と革靴の底がタイルを叩く。俺は彰を見上げたけれど、どこか遠い人を見ているような気持ちだった。これで一生お別れだろう、という考えを確信して、例えこの先互いを見かけたとしても、知らないふりでまた別れるだろうな、と。

俺は彰がそのまま行ってしまう事を無意識のうちに予想していた。でも彰はそれじゃ気が済まないという風に振り返って、口を開いた。

「でもさー、あんただって、予備校行ってるの、誰のお金？自分で稼いだんじゃないでしょ？それでこんな所いるんじゃない、サイテーなのはお互い様！」

「そっ…」

いきなりの反撃に、俺は絶句しかけたけれど、負けてはられないと思って反論する。

「別にあんなとこ、行きたくて、行ってるわけじゃない！」

「ふーん、じゃあ誰かに行かされてんだ。親？」

「答える必要ないだろ！」

俺は冷たく固まった表情で、質問を避けた。

「…怒った」

彰の声が、また不満の色を帯びた。それでもやっぱり俺が何も言わないでいると。

「行きたくて行ってるわけじゃない、なんて超後ろ向き。

ただの言い訳じゃん？ それとも仕返しなんだ？ それいつ終わるの？」

「うるさいな、関係ないだろ、そっちには」

「じゃあこっちにも口出ししないでよ。偉そつに言っぴ

マあったら、自分がまともになるよう努力したら？」

それを言われると…。

「…じゃあね、バイバイ」

「ま、待てよ」

思わず引き留める。何も言い返せずやりこめられた俺を見て、彰は満足したようだった。それ以上はきつい言葉を口にせず、コツコツ、とまた靴底を鳴らした。今度はあまり強くなかった。

「気が変わった。今からオジサンと会ってくる。じゃあね」  
軽く笑って、彰は人の中にひょいっと消えていった。俺はただ呆然とそれを見送るばかりで、結局その場から動けなかった。

「知香、最近どうなの、学校は？」

「最近って…別に」

朝の忙しい時間。父さんは今日も一人早く家を出ている。この家にいるのも惜しいぐらいに大切な仕事を、俺も将来することになるのだろうか。

俺の向かい側にいる妹は、魚をあまり好きではなさそうにただつつきながら、母さんの話を聞いている。俺はその横にいる母さんを上目遣いで見ながら、できるだけこちらに話が来ないといいんだけれど、などと考えていた頭の端で、昨日の彰のことが頭に思い出された。

結局バカにされた感じで一方的にいらなくなってしまうけど、不思議と俺は怒りを感じていなかった。確かに俺が偉そうに説教できる立場でもなかったし、彼女は俺の逃避を許してくれていた。ただ俺が、自分の自己満足で彼女を負かそうとしただけだったのだから。

「勉強はちゃんとしてる？ 来年はあんたも受験なんだから…」

もうすぐ愚痴に突入だな、という話の流れで、俺は口を動かすのを早めた。できる事ならいなくなること話で話聞かなくてもすむようにしたかったのだが。

「あーあーもう、わかってるってばー！」「ちそうさま、行ってきます！」

急ごうとしていた俺より先に、妹が苛立ったように鞆を取りあげて、キッチンから走って行ってしまった。ドアが乱暴に閉められて、その反動のように家の中はしんと静まり返る。

そして残された俺は、母さんのつぶやきを聞いていないといけなくなっていた。悔しそうな顔でしばらく知香のいた椅子を見ていた母さんは、また箸を動かして始めて言った。

「全く…どうしてあんなに反抗的なんだろう…孝宏みたい  
に、ちゃんとしてくれたらいいのに…」

「ちゃんとしてくれたら、という言葉がひっかかって、俺  
は食べるのをやめた。」

「言いなりになってたら、間違いないじゃないの。」

「孝宏は、ちゃんと頑張ってるみたいね。来年こそは大丈  
夫ね」

俺の考えている事など知らず、母さんはそう言ってここ  
らに嬉しそうに笑いかける。

「安心が欲しいのだろう。だけど俺は実際は予備校に行っ  
てなかったし、当然笑顔で返すことができなかった。」

「今より、本番の方が大事だから」

「早口で言い訳を答えて、俺は箸を置いた。」

「…行ってくる」

「あら、もう行くの？」

机の上の時計を見ながら、早めの時間に立ち上がる俺を  
不思議に思ったのか母さんは尋ねた。

「うん」

頷きながら、家から駅までの時間を考えている。不快な  
気分はないとはいえ、なんとなく彰には会いたくなかった。

「頑張ってるね、去年はしょうがなかったものね。母さん、  
孝宏を信じてるから」

家を出る時にそう言われて、俺はぐっと目を閉じた。

ただブレッシヤーを背負わされてるだけじゃないか。

俺が何をしようとも、母さんは自分の思っている事しか  
関心がないのだ。まさか俺がこんなことをしているなんて  
全く想像もせず、ただ自分の空想で楽しんで、そしてそ  
の空想通りになる事を強制している。

アスファルトの地面は光が照り返してキラキラしている。  
その眩しさに下を向いているのがつらかったけれど、真っ  
直ぐ顔を上げて歩けるほど俺はまだ前向きでもなかった。

駅についたけれど、ホームに続く階段を登りながら、や  
はり普段より時間が早いのを確かめた。彰のことを思い出  
して、これぐらいなら会うことはないだろうからいいか、  
と電車を待っている人の列に並ぶ。

灰皿の周りに集まっているサラリーマン達が、もうすぐ  
電車が来ることをアナウンスで告げられ、慌てて煙草をも  
み消している。

「白線の後ろまで、お下がりでください…」

スピーカーの声はいつもと変わらない、平坦だ。すぐに、

金属の擦れるような音と共に車両が滑り込んできた。ドアが開く前に自然と列が前に膨れる形になって、俺も後ろから押されていくと。

「ちよつと、押さないでよ」

すぐに非難の声が最前列の方で上がって、のろのろと後ろに人の固まりがゆっくり下がってくる。ぼんやりしていた俺はその動きについていけず、よろめいた。その間に誰かが割り込んで、列からはじき出されてしまう。電車のドアがゆっくり開くと、押し合いながら一斉に人が乗り込んでいく。

…まあいいか。

一瞬押しつぶされた息苦しさを吐き出しながら、俺はその流れを眺めていた。俺には充分時間があるのだから、次の電車でも大丈夫なのだった。

スニーカーは平気な顔をしていけど、誰かに足を踏まれたようで少しつま先が痛かった。あれだけたくさんいた人をすっかり飲み込んだ電車は、最後の一人を駅員に押し込まれて、ドアを閉じた。やがてまた滑るように発車していく。

次のが来るまで五分あるのを時刻表で確かめ、踏まれた足を休めるためにベンチに座る。念のためにスニーカーを脱いでみたけど、親指の爪の所がヒリヒリするものの、歩けない程度でもなかった。ただ踏まれたことにこだわってポーズを取っているだけで、ホームにはまた人が集まってきている。

「おはよ」

今度は自分でも反応が早かった。ぱつと横を見ると、もう彰が座っている。

彰は俺を見ず、前を見ていた。

「電車の時間ずらしたら、もつ会わないだろうと思ってた。そしたらホームで見えたんだもん。なんか、言い過ぎたかもと思って、一応謝るところかって」

「なんだか高飛車に聞こえて、俺も思わず皮肉で言った。

「降りてきたんだ？ わざわざ大変だったな」

彰は俺を憎らしそうに見ていたけど、その後になんちよつとむいた。

「そう。なんとなく。気になったから」

小間切れの言葉で、彰が本心でさっきのような言い方をしていたのではないとわかった。だから今度は意地悪な事は言わなかった。

「昨日はやっぱり、会わなかった」

「？」

何のことを言われたのか一瞬わからなかったけれど、会話の最後を思い出して、俺はああ、と頷いた。

「待ち合わせの銅像前に行ったんだけど、顔が好みじゃなかったから、知らないフリして帰るまで見てた。怒ってみたい」

「そうか」

俺もなぜか、彰にならって下を向いた。こういう話を聞くのが少し恥ずかしい気がしたし、今は顔を見ない方が、彰が話を続けてくれそうな気がした。

「本当は電話で話してる時からちよつとヤな感じだったから、行くつもりなかったんだ。だから孝宏に話しかけたんだよ。でもあんな事言われてさ…逆に負けるかって気になっただけで、やっぱりやめた」

その後には何かごそごそ動いているので、俺はそこで頭を上げた。うーんと両手を上げて背伸びをしていた彰は、何かを決めた時のように俺をじつと見た。顔をそらす時ではないとわかった俺も、動かずにいて、彰の言葉を待った。

「悪いこと。わかってるよ。どうしてか理由はわかんないけど、ちゃんと悪いことなんだよね。最初は、友達のうちの一人が始めて、簡単にお金が入るって、だんだんエンジニアやってない子の方が減ってきたんだ。そしたらやるのが当たり前ーみたいな空気できちゃって、もう学校帰りでもバンバン高い買い物とかしてるの。アヤもやらないの？ 簡単だよってよく誘われた。初めの方はビョーキ怖いから、とか理由つけて断ってたんだけど。最初に始めた子に突然、なんか急に用事ができて行けなくなつたから代わりにお願いって頼まれたんだよね。お金持ちだからきつとたくさんもらえるよって言われて…そこで私は断らなかつたんだ。みんなに置いていかれたくないって思ったのも、あるのかな。後で別の子から聞いたんだけど、グループで一人だけやってないのがなんかムカついてたみたいなのね。それでウソついて、私も仲間に入れようとしたみたい。まあその時はもう、今更怒る気とか全然なかったよ。私が結局選んだんだし、ね。それでも、恥ずかしい話なんだけどそれまで私、彼氏とかいなくて。初めての時はちゃんと好きな人がいいなとか、密かに思ってたんだ。でもだんだん慣れちゃうんだよね。頭のどこかじゃ、慣れちゃいけないって思うんだけど。このままどうでもいい人間に

なつちやうつて、そればかり。まあ友達にはこんな事言えないけどね」

そこで一旦言葉を切った彰は、悲しそうに笑った。俺は何も言えなかった。

いつの間にかホームはまた人であふれていた。けれど昨日と同じように、俺達には全く興味が無いようだった。

五分前と同じアナウンスが一杯に響いて、また電車がやってくる。また同じように人が吸い込まれていく。

「学校、どうするの」

銀色の車体を見つめながら、俺は聞いた。彰はわきに置いていた鞆を両手に抱え直して、今度は違う笑い方をした。

「後一本まで大丈夫だけど、今日は遅刻にする。大丈夫、私普段はいい子だから先生に信用されてるもん」

その言葉から母さんを連想して、ちくりと心臓が痛んだ。きつと本当に、俺も信用されているのかもしれない。でも

もやっぱり、素直に受け入れられない。

「それでね…」

電車が行ってしまつとまた話し始める彰に、俺は慌てて思考を戻した。

「慣れないようになって、せめてもの努力…まあこんな事やって何の努力だって言われるかもしれないけど、相手の人とできるだけ話するようになったの。ちよつとでも相手の事、知っておきたかったから。どうしてこんな事するんだろつとか、普段何やってるんだろつとか。それでいい人だと少しでも思える所があったら、罪悪感が消えるかもしれないって。あのね、ちよつとだけだけど、心は軽くなつたよ。自分に言い聞かせる事ができるから。これは他人じゃなくて、好きな人だからって。でも会つて1時間やそこらだけどね」

こじつけだけど、と笑つ彰に、俺は笑つてやれなかった。けれど昨日のような怒りや軽蔑とは無縁で、彰の言葉から感じた痛々しさが俺の体を強く支配していた。どうして、という言葉しか思いつかなかった。どうしてそこまでして続ける必要があるんだろう、と。

「終わり。なんか知らないけど、言い訳しなくなつたんだよ、昨日あんな事、わざわざ私に言つてくれた孝宏に」

鞆をぎゅつと抱えていた腕を開いて、は一長かった、と一人で呟いている。線路に捨てられた、完全に火の消えていない煙草から煙が立ち上っているのを眺めて、あれ火事にならないよね、なんて心配して。

「どうして、終わりにしないんだよ？」

言葉が小刻みに震えていたのがわかって、格好悪いとは思わなかった。

「そういつのつて、いつでもやめられるんじゃないのか？」

ここで前みたいに感情を爆発させてはいけないと、手のひらを握りしめながら、俺はゆっくり尋ねる。

「そうだね。やめられるかも。何かきっかけがあったらね。今までなかったから」

「どんなきっかけが必要なんだよ？」

焦ったように、遠くを見つめている彰に俺は言い募る。

そんな思いをしながら続けなくてもいい、続けてほしくない、と他人に対してここまで思ったのは初めてだった。

「別になんだっていいんだよ、例えば」

「何？」

「孝宏がやめろって言うてくれたから、とかさ」

言った後に声をたてて笑い出す彰に、俺は不安になった。

「そ、そんなんでいいのか？」

短絡的、と言葉に出して言わなかったけど、自分の存在があまりに軽い気がしていたので、急に責任のようなものを感じ始め、大丈夫かと思っただ。

「今まで何にも言わない友達しかこのこと知らなかったけど、バシたらきつとみんな、孝宏みたいな事言うよ。私怒られるんだ。怒られて、ちょっと嬉しかったのかもね」

自分を分析しながら、さっぱりした顔で彰は話している。またそのうち、電車がやってくる。けれど俺達はやっぱり、立ち上がらなかつた。彰はその日、昼過ぎになつてやつと学校に行った。今からじゃ遅刻どころじゃないけど、体育のテストがあるからしよーがないね、と相変わらず笑っていた。

葉書が来てたわよ、と母さんが言っていた。

夏に何か集まりがあるんだって。

俺宛ての葉書なのに母さんが先に内容を言ってしまった事にも、俺はあきらめが先に走って何も言えなかつた。そのまま二階が上がって、鍵のかからない部屋に入る。

彰と今日話した事を今でも反芻していて、人の為に泣きたいような気がしていて、けれど俺自身はちつとも変わっていないのだった。

机の上に置かれた一枚の葉書を取りあげる。

「こんにちは、元気にしてますか？ そろそろ暑くなってきましたね。私は大学に慣れてきた頃です。夏にみんなで集まらないかって話がこっちでは出てるんだ。その時は朝田君も来るよね」

全てが楽しい事ばかり、に見えた文章。  
そんなわけないか、と俺は悪意のある自分をすぐに叱った。

差出人が誰なのか、確かめなくても字でわかった。高2の時、少しだけつきあった彼女。

1学期に隣の席になって、夏にはつきあい始めて、その数ヶ月後の秋にはただのクラスメートに戻った。

俺がこんなことを言ったら相手の気に障るんじゃないか、相手は俺にどうしてほしいんだろう、何を求めているんだろう。

そういうことばかり考えていて、結局わからなくて。うまくいかないと思っただのは、俺の方だけだったのかもしれない。彼女は今でもこうやって連絡をくれる。でも、一方で俺は、先に行かれてしまったと孤独感のようなものをひどくするだけで。

今頃、行きたい所に行くための浪人なんて珍しくない。決して胸を張れるわけじゃないけど、そうなんだ。

それなのに俺がここまで追いつめられているように感じるのは。

それ以上のことを思うと、今のふわふわした、悲しいけれどつらくはない気持ちが悪んでしまう気がして、もったいなくてやめた。

母さんへの後ろめたさを少しでも解消するために、俺は机についた。まだ新しいノートは、自分の思いなどくたらないとあざ笑っているように白い。

一体俺は、どうしたいのだろう。  
見えぬ反抗を毎日繰り返して、それがばれるのを恐れながらも、裏切っている事が楽しくて。

あそこにいる時間は、確かに自分の安らぎになった。何からも解放されていないのに、何もかもから自由になって、自分だけの時間を手にしたように感じた。それでも今、こうやって机に向かって、失った時間の穴埋めをしようとしている。

どちらにもなりきれない。どちらにも偏る事ができないから、そのまま歩き出せない時間を長引かせている。  
なにかきっかけがあったらね。

彰の言葉が浮かんだ。

今の俺を、どうでもいい、とにかく変えるきっかけ。

まずそれを探さないといけないんだろうか。

とてつもなく遠いように思えて、俺は机に臥せた。何が  
必要なんだろう。

俺が恨んでいるのは母さん、俺を嫌っている妹、俺に無  
関心な父さん。

順々に顔を浮かべて、力が出ない笑いが出た。

「ダメだ…」

否定的な考えしか出てこない自分を、勇気のない奴めと  
罵ってみたけれど、何も思い浮かばなかった。

朝からずっと静かに降り続けている雨が空気を湿らせて  
いる。気温が少し高いのか、蒸し暑くなつて俺はため息を  
ついた。

頭の中では、無意識に数字が重ねられていく。

6352、6354。

とにかく早く時間が経たないかと。

本当に安心できる場所なんて、この世にあるんだろう  
か？

ここに座っているだけでも焦りが喉から出てきそうで、  
俺はそれを押さえ込もうとしている。けれど代わりの場所  
を探すほど俺は必死でもなく、ただダラダラと生きている  
だけの人間。

なんだ、矛盾してるな。

ここにもいいような気がしながら、結局俺はどこに  
いてもダメだと思っている。

そしてそれを認めながらも、延々俺は何もせずに数を数  
え続けているのだ。

そろそろやめないか？

自問すると、もう一人の自分が、臆病な自分が、イヤだ  
と首を振った。

このままで、自分がどうなるかわかっているのか？ この  
ままでいいわけないだろ。

うるさい、うるさいとまた怒鳴っている。聞きたくな  
いなら、何か具体案を出せよ。

うるさい。俺はこうやってるのが一番好きなんだ、と。

結局怠け者なんだろう、俺は。

思いついた考えがあまりに情けなくて、反抗とか義務感、後ろめたいとか言ってる自分が偽物に思える。いつ思ってもそれは自分であることに違いはないのに、自分を一時的に許す言い訳にするため、俺はそれを効果的に使うのかもしれない。よくできた偽物。

情けないけど、涙は出なかった。もう何年も泣いたことのない乾いた目は、昨日久しぶりに他人のために使われそうになった。結局泣かなかったけれど。そしてやっぱり、自分のために泣こうとは思えない。泣くために何が必要なのか思い出せなかったから。

泣けない事が人間失格の証拠とは思わないけれど、ただどこか寂しい気がした。

彰に早く会いたいな。

厚い雲の固まりから洩れる光を見上げて、俺はそう思った。

学校終わったらあそこに行くね。

昨日彰はそう言っていた。

彰は自分の事を話したけれど、あれきり俺のことをあまり聞こうとはしなかった。そのことで俺が随分助かった面もあったのだけれど、彰の気遣いを思う度に、自分の不甲斐なさばかりが突き刺さる。

なんかね、会って2日でホントに好きになるなんて思わないよ。今はまだ友達。でも話聞いてくれたから、大事な友達、ぐらいかな。

照れたように彰が笑うので、なんか自分まで照れくさくなってしまった。あまりこいつの縁がなかったからか、よけいぎくしゃくしそうだった。

ふと思えば、俺があれだけ話したのも久しぶりなのではないかと気づいた。

コンビニの店員とも、駅員も何か特別話す理由などない。下手すれば家族とだって話さない日があったんだ。

今まで普通として過ごしてきたことが急に恐ろしくなつて、俺は目眩を起こしそうになった。こうなる前は、クラスメートとも話していた、当たり前前の事だ。近所の毎朝犬を散歩させているおばさんにだって挨拶したものだ。

…早く来ないかな。

彰と話すことができれば、つまらなく潰してしまった日を取り戻せるのだと勝手に決めて、俺は切にそう願った。

彰の姿が現れたのは、5時前だった。

「遅くなった、ごめん」

走ってきたのか、息が弾んでいる。

「いや、いいよ」

本当は時計ばかり見ていたけれど、それを隠すように俺は笑った。しかし彰の方は笑顔を見せてくれないまま、声を潜めて言う。

「あのね、ほんとーに悪いんだけど、6時からちよつと…用あるの。友達とね、ちよつと。ほら、あそこにいる」

彰は車道を挟んだ向かい側の通りに立っている3、4人の集団を指差した。腕組みしたまま立っていたり、携帯電話でしゃべったり化粧を直していたりと、なにやらバラバラな雰囲気だったけれど、制服が同じなので、友達なんだなとやっとなんかわかった。

「今ね、一人が困ったことになっちゃって。なんかこの前エンジン止めた男の人に、名前と家ばれちゃったらしくて」

慌てた口調は、ウソじゃないとわかった。けれど、一体何をするつもりなのか不安になる。

「これからって、どうするんだ？」

「6時に、言われた店に来てってケータイに留守電あったんだ。その子一人だとやばいから、みんなで行く。それで、なんとか黙っててもらおうように話してみる」

「大丈夫かよ？」

内容を聞いてますます不安になって、俺は立ち上がった。

「そんなの、ちゃんと話し相手になるようなやつなのか？無視しときゃいいんじゃないの？その前に、彰が行く必要ないじゃん。もう関わらないって、決めただろ」

「…そういうわけにもいかないよ」

苛立ったように、彰は叫んだ。

「無視なんてしてて、家に電話来たら一発で親にもばれるんだよ？もしかしたら学校にも電話するかもしれない。そしたらあの子、学校やめなきゃいけないんだよ。家にもいられなくなるかもしれないんだよ？」

なぜわかってくれないんだろと声が言っている。けれども理解してあげる気にならなくて。

「自業自得だろ。そついう事わかってて、それでもエンジンこやっってたんだろ」

驚くほど冷たい言葉が、口から出た。彰ははっとして俺を見つめる。

俺は彰を引き留めたかった。もうこれ以上そういう事に関わってほしくなかったのだ。これは俺のエゴだった。でもそれを振りかざすのは恥ずかしくて、こんな言い方になるのもあった。しかしそれは、思った以上に彰を激しく傷つけていた。

「あのさ：私がもしそうならって、考えるんだよ。私のはあの子と友達だし、行かないなんて言わないよ」

これでもわかってもらえないなんて、とシヨックに酔っていたのは自分だった。

「人を仲間に引き込むためにウソつく奴らの、どこが友達だよ！」

彰の腕をつかんで、俺は叫んだ。どうして言うこと聞いてくれないんだよ、と心の中で叫んだ。心配なだけなのに。でも彰は俺を振り払った。

「それでも友達なの！ 私とあの子達は、それだけのために一緒にいて、仲良くやってきたわけじゃない！ 孝宏が知らないでそんな言い方するのは簡単だけど、言われた私がどう思つかなんて、考えてくれてない」

ひどいよ、と彰は涙目で呟いた。

「…もう行く。ごめん」  
「彰」

きっともう俺が何を言っても止まらない顔をしているんだろう。それでもあきらめきれなくて、俺は後ろ姿に声をかけた。でもそれきり、動けなかった。

「友達だもん。こんな時一緒にいてやれるの、私達だけだから」

友達、という言葉を噛みしめるように繰り返した彰は歩いていく。

信号が青になると、彰が駆けていくのが見えた。向こうで少し話した後、アーケード街の中にみんな消えていった。

行ってしまふのが本当に呆気なくて、俺はただぼんやりと立っていて、自分の思わず言ってしまった言葉や、彰の泣きそうな顔を思い浮かべている。

後から反省することはいくらでもできるけど。その時になると俺は、うまくやることができない。

母さんに何か言われる時だってそうだ、言い返そうとしても自分の話に矛盾があるのではないかと恐れているうちに口が固まったように何もいえなくなつて、うち負かされていく。頭の中でぐるぐる思いが駆けめぐっているくせに、

言える言葉は一つか二つ。それも結局、誰を納得させることもできない。誰を変えることもできないんだ。

ただ自分がつまらない、無力なだけなのをだめ押しするように、俺はそんなことばかり考えていた。彰に投げた言葉のひどさを自分にも投げつけて、これでイーブンだと自分で自分を許してやりたいがために。

化学の問題を解いていたら、帰りが遅いことを妹が咎められているのか、母さんの高い声が下から聞こえてきた。階段を上がる足音で、多分そうだろうと思った。いつもならそのまま廊下を通り過ぎて、自分の部屋に行くはずだ。

微かなノックに驚いて、椅子を半回転させた。遠慮がちに開いたドアからは、妹の顔がのぞく。

「あのさ、ちょっと話があるんだけど。勘違いだったらアしだけど」

「ごく、と俺は喉を鳴らした。

滅多に話すことのない妹にドアを開けられて、なんとなく俺は焦っていた。いつも話すことがないから、緊張という方が合っていたのかもしれない。

「なに？」

俺の場所だというのどこか落ち着かない。妹は扉を閉めると、俺のベッドに腰掛けた後、言いくそくに口を開いた。

「友達がさ、コンサートのチケット買ったために、並んでたんだって、何日前か前。そしたら近くをお兄ちゃんに似てる人が歩いてたって。チケット取った後も、道に座っていると見かけたって言ってたんだよね。でも、見た時間って昼だったらしいし…違うよね？」

妹が上目遣いに俺を見てる。

「えつと…」

その頃はきつと予備校に行ってる時間だから。見間違いないか。

頭に浮かぶけど、口に出せない。ただ焦りまくって、黙り込むだけ。

もしかしたら、妹が母さんに言うかもしれない、と思っただ。けれどやっぱりすいすい嘘はつけなくて、俺が何も言わないことで、内容を認めた形になってしまった。

「…もしかして、本物だったんだ？」

声をひそめて、妹は姿勢を低くした。

「まあ…そう」

顔をふせて、気まずい思いばかりが頭を巡る。これがばれたら母さんに何と言われるのだろう、どんなことを言われても俺は受け入れなければならぬ、なんて。まるで俺が世界で全ての罪を犯してしまったような。でもそんな気分になる。もうおしまいだ。

「そーか…」

俺がこんな事を考えていると知ってか知らずか、妹は何かと合わせて考えているようで少し上の空なように聞こえた。けどしばらくして、

「あ、大丈夫だよ、別に、言ったりしないから」と思いついたように言った。

誰に、とは言わなかったけれど、俺も妹もわかっている。そしてそれを聞いて、俺の心がホツとするのを抑えられなかった

「…サンキュ」

低い声で答えた俺は、やっと顔を上げて妹を見た。妹に気を遣われる恥ずかしさもあつたけど、久しぶりにじつと顔を見るのも、悪くないなとなく思った。

「なんかさ、あれだけ言われててんのになんでハイハイ言う事聞いてんのか、不思議だったんだけど。お兄ちゃんもやることやってんだって安心した」

静かな雰囲気壊さない程度に、妹は笑った。

「あの、あたしと違ってお兄ちゃんは大変だろうけど、頑張つて。昔はそりゃ、どうしてお兄ちゃんの事はっかりって思ってたけどさ。構われる本人が大変そうなんだもん。一人息子だしね…。いつもはこんな素直になれないから、やな態度取っちゃうけど。もうしょうがないよね。言葉変だと思っけど、頑張つてとした言いようがないや」

「…サンキュ」

同じ言葉を繰り返して、俺はこめかみをさすった。こんな時に痛み始めるなんて、変だと思っただけれど、触つていると次第に消えていく気がした。

「知香、ごめんな」

妹が部屋を出ていく時、それだけ言った。妹はなんのこど？と疑問符のついた表情で出ていった。けれど、言っておきたい言葉だった。

俺が気づかないだけで、色んな人に気遣われている。それを俺は知らずに、誰も俺をまとも好きになつてくれる人間はいないとか、バカな事を考えて座り込んでいる。母

さんの事だつてそうだ、母さんの俺への執着の強さが普通じゃないと思つていたつて、俺がなにもせず受け入れてる限り、それは何も悪い事ではないのだ。俺が何も言わない限り、何も変わらないのだ。

権利も何も持つてないふりをしながら、結局俺が動かしている。自分が今まで黙つて母さんの言う事を聞いておきながら、母さんのせいだと非難している。

俺は誰かのせいにしていたいのだ。

母さんのせい、誰もわかつてくれない社会のせい。

でも全て、自分の責任だ。

誰かに何言われてたつて、それを自分の中で消化して、自分の動く指針にすれば良かった。

全てを呑み込み、受け入れた顔で、でも内心では自分が被害者のようなフリをしている。

それは一番卑怯なことじゃないだろうか。

俺はさつきから同じ事をぐるぐる考えていた。けれどこの前彰が行つてしまつた後とは、少し違つていた。

もう少して何か先が見えるような。先が見えなくてもいい、どこでもいいから足を踏み出せそうな気がした。俺が延々意味を求めて探していたものは見つからなくても、それはそれでいいような気がやつとしていた。

彰は今どこにいるだろう。

会いたい。

あの日の俺の言葉を謝りたい。

同じ事繰り返してばっかだけだ…。

それが今までに俺がしてきた事の、償いの一つになるんじゃないかと考えていた。

俺が生まれ変わるために。

久しぶりに予備校の階段を昇る。本当はやつと決心がついた所だ。朝から建物の近くをうろろして、1コマ目が終わった所で、よし行くぞ、と勢いをつけて校舎に向かつた。

事務室の前を通つて、時間割の載っている手帳をまた見返す。ここに来る前に何度も確認したのだが、それでも足りなかった。

休憩で上階から降りてくる生徒や、さつきの小テストできた？と笑いあつている生徒。

誰も俺の事を知らない。休みっぱなしだなんて知つてい

るのは1人いるかないか。その1人もきつと、顔も覚えてないだろう。

少し気が楽になって、次は英語だと最上階の大教室に入った。部屋に入るともう開始数分前だったので人の移動は大体終わっていて、真ん中の席しか開いていなかった。すいません、と何回か会釈して、間を通してもらう。まだ折り目も薄いテキストを取り出して、机の上に置いた。

うつすらと覚えのあるチャイムを聞くと、すぐに先生がやってくる。

「この前の続きですな」

カサカサとページをめくる音が一齐に。俺も右側の人を横目で見て、テキストの8ページを開けた。結構進んでることに小さなシヨックを感じる。当たり前か。

俺が数を数えている間に、ここも同じく時間が流れているのだ。

「ではまず英文を読んでいきます」

講師の先生は、全てに慣れた口調で授業を進めていく。俺も毎日通っている生徒のように、すぐに周りに馴染んだ。ただ集中すればいいだけの、簡単なことだった。

集中すると、授業は面白かった。忘れかけていた知識をまた拾い集めなきゃという思いもあって、その時間中は全く家族の事や彰の事を思い出さなかった。

英語が終わると、また移動。テキストをまとめて次の教室に急ぐ。歩きながら、また色んな問いが沸き上がってくる。

俺の行き先は、最初から決まっていたのだ。俺が自宅で勉強するにも、母さんの言うとおり予備校に行くにも、求める結果は来年大学に行く、それだけなのだ。それは俺の望みでもあったのに、ただ自分の意志を貫くのが正しいとばかりにこの場から逃げた。

でも逃げた先で居場所を見つけたものの、すぐに弱気になり、今ここにいるのが本当に幸せなのかと迷って。

俺がこだわっていたのは一体なんだったのだろう。

自分は何を欲しがっていたのだろう。

親のせいにして、土下座して謝ってほしいのか、今でも？俺はただそれを見たいだけのために今までこんな思いをしていたのだろうか。

意地悪な事をされた子供の意趣返し。そうとしか見えな  
い。

いつでも自分に立ち向かえない何かがあるのだと母さんを恐れている。けれど俺はそれに突き当たる度に、大した抵抗も見せず、それでいて不服を感じている。

自分が今まで何かを我慢している事が、一方では被害妄想だと笑い、一方では誰かに叫びたがって。相手がいないから、無意味に数なんか数えて。

どちらにも転べないなら、どこにも行かなくていいのだと俺は膝を抱えてうずくまっていた。それで誰に何をわかってもらいたかったのだろう。

言わなくてもわかるなんて超能力者か？

なんの意志表示もせず俺の思い通りに世界が動いたらいいのにと果てしない望みを無言のまま抱えていた。

滑稽な自分に笑いたくなくなったけれど、周りに人がいる事を考えて、やめておいた。

椅子に落ち着くと、もう一つ彰の事を考えた。もちろん俺が馬鹿なことばかり彼女に言っていることもあるし、彼女が俺に話しかけてくれた人だったから。

友達だから、としきりに言ってた。

彰にとって友達は、何よりも大切なんだろう。俺のような他人からは見えない糸を握りあっているのに違いない。

最初に援助交際を始めた子に、それ以上はやめなよと言えることもできたはずだ。そうすれば彰も、今みたいに苦しむこともなかったかもしれない。

でもこんなの、その子らと付き合いのない俺達だから言えることだ。彰はきつと、言えばきつと反感を買うのである事をわかっていたのだろう。友達だから余計に口を挟めない、というのもあったのかもしれない。

彰はただ、自分のけじめをつけているだけなのだ。友達だからと許していたから、こうなった時にも自分一人だけ仲間から外れるわけにはいかないと思っただろう。

俺は行ってしまおうとする彰を責めたけれど、俺の言葉などでは軽々しく口を挟むことではなかったのだ。あの世界で生きているのは彰。彼女自身が決めることで、誰かの言葉でくるくる変わって、責任を投げ捨ててしまうなら、それは俺と同じになってしまう。

したり顔で道徳を説くのは俺の役目じゃなかった。彰はちゃんと自分の道を考えていた、俺よりも。

チャイムが鳴る。教室に数人駆け込んできて、それからざわついていた室内は次第に静かになっていく。

泣きそうな彰を見た日以来、あの顔に会っていなかった。

電話で連絡を取り合おうにも、番号をしらなかつた。

俺はケータイを持っていない。あつたら便利だろうなとは思っていたけど、いつでもどこでも監視されるような気がしたから、母さんの奨めを断っていたのがネックになつたのか。今時いるんだ、と彰が目を丸くしていたっけ。

それでも俺は、もうあの場所で彰が来てくれるのを待っているわけにはいかなかった。

世界中でたった一人、自分だけが悩みを抱えているようなふりで立ち止まっているなんて、今の俺にはもう演技できない。

それに、俺はもっとマシな人間になりたかつた。自分の事を思うと何も釈明できないと萎縮するくせに、すぐに忘れて他人に偉そうなことを言う。

そんなバカみたいな人間でいるのがいやだつた。自分を貶めること以外の時間が欲しかつた。

それにまた予備校に戻れば、何事もなかつたように、母さん達に対する後ろめたさのような気持ちも解消していくのではないかと思えた。

このまま、俺は予備校に通えばいい。それを妥協だとは思わなかつたし、俺の事で心配してもらっているのは事実だ。考え方を変えれば、こんなに気が軽くなるのかと驚くほどだつた。

「孝宏、ちょっと来なさい」

ただいまと声をかけてリビングをのぞくと、妹が座っているソファの向かいにある肘掛け椅子に母さんが座っていた。テレビは消えていて、一緒にいるなんて珍しいな、と確認した後すぐに部屋に上がろうとした時だつた。

「なに」

思えば、いつもなら家中に立ちこめる夕飯の匂いもなかつた。これから何が起こるのか全く予想していなかつた俺は、軽い気持ちで鞆を床に置いて、母さんに近づいた。

「座りなさい」

「……いいけど」

スペースの空いている妹の横に腰を落とすと、動揺した瞳で妹が俺を見た。それでも俺はわかつていなくて、いつもの父さんに対する愚痴かなにかかな、などと思っていた。長引くのは嫌だつたけど、呼ばれたからには仕方ない。

「孝宏、あなた昼、一体どこに行ってるの」

こう切り出されて、あまりの突然に俺は体が竦んだ。それからゆっくりとばれてしまったのかという気持ちがないかという感じが思わぬ体の中に降りてきて、とうとう来た、という感じで思わず妹を見てしまうと、言ったのはあたしじゃないよ、という風に妹が小さく首を振った。

「なんだろう？ 妹の友達みたいに、俺をみかけたんだろ  
うか？ あそこに座り込んでいるのを？」

「ねえ、どこ行ってるの」

声は妙に静かだった。けどそれが逆に不気味だった。俺は何も言えなくて、急に喉が乾いてしょうがないような気分になる。母さんはどこに行ってるのかは重要じゃないんだ、行っていないことが一番ダメなんだ、と心の中で呟いた。何も返事ができなかった。

「これ、なんなの」

背中から母さんが僅かに震える手で取り出したのは、白い封筒。印刷してあるのは俺が行ってる予備校の名前で、それを見た瞬間、俺はしまったという顔をしたに違いない。中に入っていた紙は、出席状況を報告する内容だ。俺が郵便受けから抜き出して、一番下の引き出しの最奥に入れていたもの。

欠席の印にバツがついていて、当然俺の出席状況は散々なものだった。それを見たら、母さんが怒るのは当然予想できた。だから隠していたのだ。

机の中を探られたという事実を怒る気はなかった。ただ困って混乱して、これからどうしようとかばかり考える。心臓がバクバク言ってるのがわかった。顔が紅潮してくる。

「4月も、5月もほとんど行ってないなんて、どういっつもりなの？」

説明を聞くまで逃がさない、というように母さんは立ち上がった。その雰囲気からも俺は脅えを感じ始めている。

「俺：前から、予備校行きたくないって、言っただろ。でも、今は俺、ちゃんと…」

少しでも空気が尖るのを押さえようと、俺は小さく答えた。それでもももつとつと、嵐が起きるのは決まっていたのだ。

「行きたくない？ 何様のつもりよ！ 何もかもほったらかしで、子供のためだけ考えてやってきたのに？」 それなのにどういっつことなのよ？」

来た二

俺は心の中から沸き上がる怖さに、もう降参しそうになつていた。妹も真つ青な顔をして、動かずにいる。予備校の話を断ろうとした時にはその場にいなかったけれど、あの物凄い声は2階に届いていたはずだった。

母さんはこちらに詰め寄り、上から見下ろした格好で俺を責める。

「あなた、父さんにも済まないと思わないの？ 誰がお金出してるのよ、ねえ。毎日ずつと働いて、あんな大金出してくれたのよ。それなのになんとも思わないの？ 自分が努力して、親孝行してやるうと思わないの？」

「やめてくれよ……」

俺の口から細々と飛び出す声に、母さんの勢いが負けるわけがなかった。容赦なく責め立てられ、いつものように俺は両手を上げ、羊のように後ろをつついていかなければならないのだろうか。

「びっくりしたわよ。大人しく勉強してると思ったのが、行かずに遊んでるなんて。あなた将来、どうするつもりなの？ 父さんや母さんがこの家出ていけって言ったら、一人で生きていけるの？」

「やめ……」

マシンガンを撃つように母さんの言葉が俺の体を貫いていく。なんの反応も求めていない、ただ俺を傷つけるための言葉が。

「もう母さん、あきらめたわ。ここまで一生懸命育てて、恩を仇で返すような子だったとはね。一人じゃなにもできないくせに、こんなことしてたなんて。母さんを騙すのは面白かった？ そうだろうね、面白かったって言いなさい、ほら」

「やめてくれよ……本当に」

ここまで言われて、途方に暮れた気分になる。たまらない。思わず頭を抱えたけれど、高音がキンキンと響いてくる。聞きたくないのに、無理矢理鼓膜をこじ開けて入ってくる。

「なに？ 言いたいことがあるならちゃんと言いなさい。いつも不機嫌そうな顔して、母さんがどんなに大変かわかってないんですよ。自分がどんなに恵まれてるのかわかってないんですよ？ 何もかも当たり前だものねあなたは。高校の時だって、母さん夜食作ったり本買って上げたりましたじゃない。それなのに裏切るような真似して、」

「もうやめろよ！ うるさいんだよ！」

「うるさいって…そんな言葉遣い」  
「やめろやめろやめろ」

俺は立ち上がって怒鳴った。家の外まで聞こえてたってかまやしない。体の底から振り絞った絶叫。

母さんは大声に驚いて、確かに黙ってしまったようだった。妹も同じく驚いているらしい。

静かになって少し安心すると、俺は涙に濡れていた頬を擦った。

悔しさなのか悲しいのか、いつの間にか俺は泣いていた。床にぼたぼたと落ちる雫が何個も増えていく。

「頼むから…もうやめてくれよ。そういう風にガンガン言われたって、俺にはもうどうしようもないんだよ。予備校行つてなかったのは、謝る。どうしてもイヤになって、逃げ出した。母さんや父さんが俺の為にしてくれた事も、言わないけど感謝してる。でも、母さんが今みたいにまるで俺が全然何も考えてないとか、俺が父さんや母さんの事をひどく思ってるとか、そんなこと言わないでくれよ…」。そんな事言われると、母さんの事本当に嫌いになりそうだよ。この先、生きてる限り俺を都合良く動かすんだろってか、ひどい事考えてさあ…」

家の中で聞こえるのは、かすれた俺の声だけ。

「もう母さんのせいになんてしたくないんだ。それなのにどうしてもそう思いそうになって…俺がもっと強ければそんな事思わないんだろってけど、今の俺じゃ駄目なんだよ…」。後から後からこぼれる涙で顔をぐしゃぐしゃにさせながら、俺は頭を下げていた。

「母さんが俺のためにしてくれてるのは本当にわかってるし、ちゃんとありがたいつて思ってる。でも今みたいに言われたんじゃ、俺はこれ以上どうしたらいいのかわかんないよ。なあ、どうしたら気が済むんだよ？俺がずっと母さんの言うこと聞いてたら満足？でもそれじゃ耐えられないんだ。今のままじゃ俺、何するかわかんないよ。誰かの責任にしたいくないんだ。少しでいいから、俺の事ほっといてくれよ…頼むからさあ…」

「そ…そんな、母さんはそんな、恩着せがましい言い方なんてしてないわよ、」

母さんはさっきとは全然違って、おろおろと弱々しく言った。俺は横で鼻をすすりだした知香を見て、また続ける。

「知香の事だっけそうだよ、俺の方に構いつきりで、中学

の運動会行けなくなったの覚えてない？ 知香が何かでいい成績取ったって、俺の事ばかりだったじゃん。俺なんか大したことなかったのに、知香の方が俺よりずっと頑張ってるのにさ。そういうのイヤなんだよ、そのことで自分が知香に気使ったり、話せなくなるなんてさ……頼むよ……」  
また頭を下げると、やがて妹が声を立てて泣き出した。  
母さんは相変わらず、とまどった顔で黙っていた。

誰も話さない時間がしばらく過ぎると、帰ったぞ、と少し不機嫌そうな声が遠くで聞こえた。玄関の閉まる音、次にリビングの扉が微かに音を立てる。

「ただいま……」

そのまま父さんの声は途切れた。

俺が泣いて、知香も泣いている。母さんは困って黙り込んでいる、今のこの不自然な状態。

俺は真っ赤な目をして、父さんを見た。何か言ってくれと思うた。けどさ秒近く見つめ合った俺達は、先に父さんが顔を歪めることで視線を外した。

「何やってんだ、一体」

呆れを含んだ声で、そのままリビングを出て行くこととしたから、俺が素早く追いかけて、肩の所をつかまえた。小さい頃は追いつけないだろうと思っていた身長は、気づけばいつの間にか俺の方が大きくなっていった。隣に立つ事なんてないから、今まで知らなかった。

このまま逃げられちゃいけない。逃げられたら、また同じ事だ、と頭の中で唱えていた。時計の秒針が時を刻む音が響いている。

「なんだ？ 疲れてるんだぞ」

抗議するように肩を引く父さんに、俺は鼻声で言った。

「なあ、そんなに俺達の事厄介だと思ってるの？ 仕事ってそんなに大切？」

「何言いだすんだ。顔ベチャベチャだぞ、洗ってこい」

まあ落ち着け、とばかりに俺の腕を軽く叩いて逃れようとする。向かい合おうとしない態度に、俺は叫ぶ。

「そういうことはどうでもいいんだよ！ 俺が聞いているのは、俺達の事なんかどうでもいいのかって事だよー！」

俺が大きな声を出すなんて、初めて見たのかもしれない。父さんはびっくりした顔で、俺の腕の上で今まで叩いていた手を止めた。

「確かに朝から晩まで仕事で、大変だろうってのはわかるよ。けどさ、父さん何のために働いてんの？ 俺達のため

だつて言うなら、そこまでしなくていいよ。金ないなら俺だつてバイトする。だからその無関心な顔するの、やめてくれよ。家帰ってきてても何も話さないで黙ったままで、母さんとも誰とも話さないで、喧嘩もなしの家つて絶対ヘンなんだよ！　こんな家、最低だ！　俺は大っ嫌いだよ！」

俺の怒鳴り声を間近で聞いて、さぞさかかっただろう。けれど怒鳴られて視点の合わない父さんが言ったことは、そんなことではなかった。

「厄介なんて…そういう風に考えたことはない。ただ何のために働いてるのか、と聞かれると…よくわからん。お前達のためでもあるんだろうし、父さんのためでもあった。仕事でいい成績を残すのが嬉しかったし、それがまず一番で、家の事は自分がいなくてもうまくいくと思ってた…」

ずるずると俺にくっついていていた手が滑り落ちる。俺もずつとつかんでいた肩を離して言った。

「このままじゃ俺達、父さんにくっついてる金食い虫で終わっちゃうよ。父さんが俺達恨みながら行きてくなんてイヤだよ」

「そんな事、思うわけないだろう」

父さんが激しく否定した後、泣いていた知香がゆっくりと立ち上がった。俺は知香に視線を移す。知香は時々しゃくり上げてながら言った。

「お兄ちゃんの言うとおりだよ…学校で友達はさ、父親と近くにいるのも勘弁してくれって気分とか笑って言うけど…好き嫌い以前にあたしは最初から、父さんと一緒にいた記憶ないよ。そんな事思えないくらい、父さんは遠かったよ。休みの日だつて、いつも出掛けてたでしょ？　あたしが部活動、何やってるか知ってる？　知らないよね、話したこともないもんね」

これが一番きつい言葉だったのか、父さんは帰ってきた時よりもっと苦い顔をしていた。誰もがしばらく黙り込んだ。

部屋の中で4人全員が立ちつくしたままなんて、さらに不自然な風景だつたらう。

「少し、考え直さないといけないのかもしれないな…」

ぼつりと呟いた父さんは、さっきから一言も話さない母さんの顔を見ていた。母さんはまだどことなく不安そうなの、複雑な顔をしていた。今まで従順だと思っていた子供にそんな事を言われて、とまどっているのかもしれない。それでも今日ここで話したことは間違いないんだと強く

思って、思わないといけな気がして、俺はまた涙が出た。

俺がいた場所は、その数日後から業者が出入りして機材を運び込み、なにやら新しい店の準備を始めたようだった。1ヶ月後にはきつと薄汚れたシャツターも塗り替えられて、人の絶え間なく出入りする所になるだろう。まるで俺がその場所を使えなくなるのがわかっていてあの夜が起きたように、どこかに神様がいるのではないかと思わせた。

「行ってくる！」

日曜日、スニーカーを履きながらリビングの方に向かって叫ぶと、母さんが出てきた。

どこ行くのとは聞かれずに、あまり遅くならないようにとだけ言われた。

あれから母さんが特別に変わったというわけではない。何かと俺のことに首をつっこみたがるし、予備校の出席表はちゃんとチェックされている。それでも俺が前みたいにただ話を聞いて頷いているだけではなくなったからか、急に爆発する事はなくなった。

父さんはまだ部屋で寝ているのだろう。急ぎじゃない仕事はやらないと言って、たまに早く帰ってくるようになって。初めのうちは休日も、どこか連れて行くぞと本人がやる気一杯だったけれど、妹はバトミントン部で試合があったり俺は模試があったりと忙しくてなかなか一緒に出掛けることは少ない。それでも母さんと時々食事に行ったりしているそうだから、邪魔しないであげようかと兄妹2人で笑っている。

「待って待って！」

妹がスポーツバッグを抱えながら走って2階から降りてきた。今日は県大会前の特訓練習があるとか言っていた。

「あたしも行く。お兄ちゃん、今日試験？」「いや、ちょっと図書館まで」

気分転換、と答えて一緒に玄関を出る。行っただけじゃない、と中から聞こえる声に、俺達はまた行っただけじゃ返事をした。

「お兄ちゃんの彼女、見つかった？」

強い日に照らされながら、歩道を並んで歩く。道ばたの草がこれでもかと背伸びをして太陽に向いている。もうすぐ夏だ。

彰とのことを、妹には少しだけ話していた。

「いや、彼女じゃないんだけど。…会ってない」

道路を踏みしめるスニーカーが、この話題でどこことなく不安定に感じる。

「でもその顔、マジっぽいよね。もう会わないの?」

「そりゃ…俺がそう思ってたって、向こうにその気がなきゃ無理だろ」

何度も予備校に遅れそうな時間ギリギリまで電車を待った。車両をくまなく見ていっても、彰の姿が見えなかった。

まるでストーカーみたいだな、と苦笑しながらも。そして彰がいけないということは、きっともう俺に会いたくないんだろつと判断した。

「あーこういう話はやめやめ。それよりお前は自分の世話しろよ」

「うるっさい!」

一発頭を殴られて、痛え…とつぶやいてるうちに別れ道に出る。

バス停の方角に走り出す妹を少しの間見送って、俺も駅に向かった。今日は予備校よりもっと手前の近い駅で下車する。

学生のために特別に備えられている学習室には入らず、本棚の列で歴史のジャンルを探した。

この前日本史の授業で講師の先生が教えてくれた話が、自分が覚えていたのとは違ったので、どっちが正しいのかわか調べたかったのだ。日本史が割と好きだったので、自分の知識に少し自信があつて。しかし1時間もしないうちに、自分が間違っていたことがわかった。当たり前か、間違ったこと教えられるはずないよな…と1人で恥ずかしくなりながら本を戻しに行く。

大きな採光ガラスから差し込んでくる光を仰いで、思わずため息が出た。

ちよつと前まではこんな所に来るなんて想像もしてなかった。一生俺はあそこに座り込んでいる気がしてた。

俺の一体何が変わったというのだろう?

頭をひねったけど、これという答えも出てこなかった。わからない。

図書館を出ても、まだ家に帰る気分ではなく、気分転換の続きでなんとなく電車に乗り込んで、なんとなく繁華街に近い駅で降りる。

俺の足はまた、あの場所に歩いていく。

日曜の街は人出が多くて、余計に色んな音が聞こえる。子供の泣く声や、クラクションが派手に鳴らされたのを時折振り返りながら、目的の場所についた。

工事が休みなのか、またシャッターが閉まっていた。それでもその前に木材が積んであったりと、以前とは変わったことが一目でわかる。

俺がここで考えていたこと。予備校に戻った時は全て無意味だったと思っていたけれど、そうなんだろうか。何もつかめないのは、本当に何もなかったことになるんだろうか。

でもそしたら、今の俺はなんだ？

手のひらを開いて、じっと見てみた。何も見えない。

…そんな簡単になんでもわかるわけないか。

あきらめて、立ち去ろうとしたら。困った顔に出会って、足が止まった。

「会っちゃった…」

どうしようもなく声も困っている。今日は制服を着ていない彰。

「彰……」

本当にこんな所で会うとは思わなくて、俺は名前だけ呼んで、呆然となっていた。

「ここ、なんか使えなくなっただけだの知ってたんだけど、前にもぞいたからいないの知ってたし、日曜だから絶対いるわけないって思ってた。」

彰もかなり慌てているようだ。

「なんとなく、通りかかっただけだよ。別に探してたわけじゃないの。だって会ったの怖かったし」

「あの、ちよつと待って」

動揺している彰を押さえて、とりあえず、

俺が先に話してしまおうと口を開いた。

「俺はずつと探してた。でもなかなか彰に会えなくて。聞いてもらいたい事があったんだ」

言ってる間に頭に閃く物があった。

「あつその前に、この前の謝らないと……」

「いいいいいよ、だってあれ別に、悪くないもん」

「いや、そーいうわけにもいかないだろ」

「いや、ホントいいから」

どっちとも引かなくて、やっぱり慌てていて、おかしく二人とも一気に吹き出してしまった。顔を見ながら笑いあって、ちよつと座ろうよと腕をつかんで一緒にしゃがん

だ。「じゃあ、謝るのナシで…あのさ俺、最近予備校戻ったんだ」

「…そうなんだ。良かったね」

優しい声で言われて、耳の辺りがくすぐったくなりながら続ける。

「彰に言われた通り俺は親の事嫌いになってて、あそこにいるのはちよっとした反抗みたいな気になってた。でも何年もまともに話した事ない妹とちゃんと話す機会があつて、仲直りじゃないけど、それに似たようなことがあつてさ。」

それから予備校に戻ってみようかと思つて。なんか気が楽になつたのかな。でもその後にはサボつてたのがばれてむちゃくちゃになつただけけど、なんか親子ドラマみたいな感じで、いつの間にか解決して…」

「ドラマ？」

変な所でつつこまれて、俺は照れ笑いをした。

「そうだよ。俺泣きまくり、妹泣きまくりで」

「ウソ」 見てみたいよ泣くとこなんて」

彰が大笑いして俺の腕を叩く。俺も合わせて笑つた。

「なんかよくわかんないうちに、ものすごく楽になつた。家族なんて、一緒にいるのが一番嫌な事だつたけど、今は家に帰るのも楽しいんだ。変な家族だけだ」

「そうか。良かったねえ」

彰は同じ言葉を繰り返して、俺に笑ってくれた。彰に話した事で、俺は気が済んだけれど、あれ、と思ひ当たる事があつて尋ねた。

「そう言えばこの前の、男に会つてやつ。あれ大丈夫だったか？」

これを聞かれて、彰は少し表情を曇らせた。

「ん…あの後ね、ちよっとズルイけど相手の男の人に、家にばらしたら警察に駆け込むって言つて、黙つてもらつたことになつたんだよね。すぐに了解してくれて、ラッキーだった。あんなのに本当はルールなんかなくて、いつ起きてもおかしくない事なのはわかつてるんだけど」

彰は伏し目がちになりながらそう言った。

俺は良かったなと声をかけそうになつたけれど、まだ彰が浮かない顔をしているのは他にも何かあると思つて聞いた。

「どうしたよ」

彰はしばらく唸っていたが、思い切つたように話し始めた。

「あの後、もう抜けるって言ったの。そしたらなんかみんな思いっきり怒って、最近は1人で行動する羽目に、なっちゃって…」

あははー、と彰は笑ってみせ、でもすぐに笑いを消した。さっさと変わる表情に、深刻さが走る。

「急にいい子ぶるななんて言われちゃった。これで私が平気だったら全部なんにもなかったことになるのかもしれないけどさ。一緒にお弁当食べたり、電話したりメール送ったりとか。そういう相手がいらないのって、やっぱりまださみしいよ。」

そう言ったきりタイルを見つめて黙り込む彰。

それは俺もよく気持ち分かることだった。1人はつらい。思いがうまくまとまらなかったけど、励ましたいと思っで、できるだけ自分の本心を伝えようとする。

「あのさ…今までの友達が一生の友達になるなんて決まってるけど、過去だけで将来ができてるわけじゃないと思っう。友達いなくなつて、俺は…俺がいるしさ！ここで彰と会ったのも何かあると思ってるし、彰が良ければこれから会いたいと思ってる。何がいいのかとか、そんなはまだわかんないけど…うまく言えないけど。」

言いながら顔がやたらと熱くなっているのがわかった。きつとはた目から見ても赤くなっているのだからと予想がついたけれど、彰は笑わずに、今度は泣きそうな顔をしていた。

「ありがとう…でも今こんな事に捕らわれているのは、私がバカだからなのかな…？ 大人になったらこんなのを忘れるかな、こんな事で悩むなんてみっともないって思うかな？ 大人になったらもっとすごい人間になってるの？」

「それは、俺だつてわかんないし…怖いよ。」

俺は歩いていく人の顔をなんとなく眺めながら、首を振った。

自分がウジウジしている事に区切りをつけられなくて、どこにも行かずにいることがただ気持ちが良いだけでこうしているのではないかと不安になったり、人に責任を押しつけて自分で解決しなかった俺。

友達という枠から外れたものの、まだそれを欲しがっている彰。

それはどちらも、自分の状況がつかなくて、でも同時に快適だったから、抜けられなくて、抜けた後もまだ求めている。

でも俺達は歩いていかないといけない。

「ここにいた時俺、数、数えてたんだ。目的なんか全然ない、ただそうするだけでどこにも行きたくないって、自分で思ってたんだ。でも俺はもう、ここから抜けることにした。何か一つ利口になったわけでもないけど。ただ、無駄じゃなかった気がするんだ。わからない事が相変わらずわからない、どうしようもなく進歩のない時間だったけどさ。」

「いいな……」

感想のように言っただけで先に立ち上がった俺を見る彰の目が細められていたのは、太陽の光が眩しいからだろうか。

「一緒に連れてってくれる？」

「え？」

いきなり手を差し出した彰に、俺はどうしていいのかわからなくて、また聞き返しただけだった。

「こういう時ってさ、取りあえず引っ張ってくれるもんじゃないの？」

軽いふくれっ面で彰は、結局自分で立ち上がる。でも冗談のしるしにすぐに笑顔を見せてくれて、俺をほっとさせた。

俺は彰にも慣れなければいけない。すぐに表情が変わって、本心はどれなのか翻弄されない時はない彰。

「ま、いや。人についてくのって、苦手だから」

さっさと人の波に入っただけのこととする彼女を、俺は慌てて追いかけた。

「どっちについてくとかじゃなくてもいい、ちょうどいいペースで歩いてたら、きっと一緒に進める」

横に並んだ俺は、くさいセリフだと自分で思いながらも前を真っ直ぐ見たまま言った。彰は茶化さずに軽く頷いてくれたようだった。

俺はちよつとだけあの場所を振り返った。わざわざ立ち止まって、考え込む事が俺には必要だった。本物の宝物を見つけられなくても、何かを探すその行為が大切だったのだ。

彰が友達を失った事で、何をつかんだのかわからない。まだ何もないのかもしれないけど、今笑ってくれるならそれで良かった。

「お腹すいた……」

両手で大きめに腹を押さえる彰。

「俺、金持ってないよ。昨日の昼飯の残りがちよつとある位」

財布の中を探って、小銭を何個かつかみだした。ほら、と見せるとちよっと彰は口を尖らせた。

「…貧乏」

「あ、そこら辺のコンビニで何か買ってき。あつちに公園あるんだけど、ハト見に行こうぜ？ うじゃうじゃいるんだよこれが。でも俺にはなついてくれないかわいくないやつらで」

彰の一言を無視して、今度は俺が前を歩きます。

「勝手に決めないでよー、ちよっと！」

怒鳴る声が追いかけてくる。

シャツをつかんでくる右手を離す時、どさくさまぎれに握った。ハトの公園に着くまで握っていた手は緊張して汗びっしょりで、心臓の鼓動も恥ずかしいほど弾んでいる。

彰の手を握りながら、相変わらず頭の中で増えているけれどももう訳に立たないカウンタが、今まで心臓と同じスピードで進んでいたことに気づかされ、時計を見なくても時間はここに確かにあるのだと急に理解できて、少し笑えた。

『COUNT UP』鷹月秋夜 著

sakka.org